

—探求・川にちなんだ万葉集の歌—

# 万葉の川心 第36回

横浜市立綱島小学校教諭 澤井 園子

舎人皇子に献れる歌／柿本人麻呂（巻第九 一七〇四番歌）

ふさ手折り多武の山霧しげみかも

細川の瀬に波の騒げる

ふいに、激しいめまいと吐き気に襲われた。一週間ほどして医師の診断が出た。「原因はストレスですね。病名は検査を進めながら絞っていきましよう。」命に関わる病気ではありませんが、入院するのがベストです・・・医者の声が遠ざかっていく。嵐の中の小舟のようにとても立ってられない状態に吐き気が重なっているというのに良薬はなく、しかも半年以内にまたこの状態がやってくるというのだ。仕事が最高潮に乗り多忙を極めるなかで、紹介状を握ってやっと大病院にたどり着いたのに、そこで終わりではなかった。

「まいったよ。」電話の向こうの疲れ切った友に、なんて声をかけようかと思索した。責任ある立場の彼は仕事を投げることなどできない。性格的にすべて「適当でいい」などと済ませられない。やりがいのある仕事をフル回転でこなし、休みもなかった。正直しんどいが、今が勝負とばかりはりきっていたのは知っていた。けれど、自分で仕事を組み立てるといふより、大きな渦に飲み込まれるように仕事は増えていった。そして病魔が取り憑いた。「ストレス」・・・現代病はすべて見えぬ何かの圧力によって引き起こされている。仕事も家族も放り出して好きなことをしたところでその怪物が消えるとも思えない。もっと休んだ方が、温泉行くとか、好きなバイクに乗ったり、いっそ飲みに行つてばあっと・・・すべての言葉を飲み込んで、友の声をただ受け止めるしかできなかった。

流れる川の波音が激しさを増してきた。なにやら騒がしい。不安に駆られて源流の多武の山を見れば、すっかり霧に包まれ、ぐんぐん谷の方へ降りてきているようだ。雨気を含んで流れが激する。穏やかに見える川面がみるみるとその表情を変えていく様に心の琴線が揺れる。霧の広がりは不安の広がりへとつながる。人は自然の中で生きてきた。川に霧に心を映してきた。そうして心癒し、自分を見つめてきたのかも知れない。今、何より自分自身が見えなくなってきたと感じるのはなぜだろうか。

細川（今の冬野川）は、奈良県桜井市多武峯から発して祝戸で飛鳥川に注ぐ小さな川である。このあたりには古墳が多い。また、枕詞の「ふさふさと手折つて枝をたわめた」多武峯から飛鳥に出る山道は飛鳥藤原の全貌を楽しみながら降りる道となる。写真の歌碑は談山神社のバス停から神社に向かう途中にあった。

もう少しで仕事にきりがつくという言葉に、「頑張り過ぎなくていい。あなたより大事な仕事なんてないから。」とだけ告げた。力になりたいのに何もできない自分がもどかしかった。

